

1997「植村直己冒険賞」受賞者



米子昭男
大阪府堺市在住

(撮影 加藤新二)

左腕を失うハンディを乗り越え ヨットで大西洋・太平洋単独横断

趣旨

海が好きで水産高校に進学。念願がかなって北洋トロール漁船に就職したが、23歳のとき操業中の事故で左腕を失う。しかたなくオカの仕事に就いたが、堀江氏がヨットで太平洋横断したことを思い出し、海への思いはいつそう強くなる。漁船には乗れないが、ヨットでなら自由に海に出ることができると思い、堀江氏の著作やヨット雑誌を読みあさり、海に出る夢を膨らませ、小型船舶の操縦士免許の取得を試みた。しかし、片腕の肘がないため受験できず、片腕でも大丈夫なことを自ら証明してみせようとの思いが募り航海の決断をした。

サイパンにてヨットを操る米子さん



(撮影 加藤新二)

3万キロの航海の跡



冒険内容

10年ぶりの小型船舶免許取得再挑戦も片腕ハンディキャップのため取得できず、免許制度に一石を投じるつもりで、公然と出港しようと思ったが、親戚の猛反対を受け逆らえず、免許の不要なフランス船籍の外国船として出港することを決める。

1995年4月フランスで25ftのヨットを300万円で購入。この愛艇を自分の境遇に例え〈エミュー〉（飛べなくなった鳥）と命名する。クルージングの出港地となったラ・ロッシュェルで、操船の仕方をマリーナにやってくる人たちをつかまえて、日常会話ブックを頼りに教わるとともに見よう見まねで2ヵ月間でマスター。

1995年6月15日フランスのラ・ロッシュェル港を出港し、カナリア諸島から大西洋を横断、パナマ運河を通して太平洋に抜けタヒチやグアムなど南太平洋の島々を巡って大阪府岬町の淡輪ヨットハーバーに1997年5月12日に入港する2年かけ約3万キロの航海を成し遂げた。当初の計画では、6ヵ月で航海を終えるルートを組み、スケジュールが狂うと焦って無理なセーリングをしていた。しかし、コロンビアで出会った札幌の夫婦セーラーから、のんびりクルージングをすることの大切さを教えられた。その後ルートも南太平洋に変更し、各諸島に寄港しながらゆっくりとクルージングを進めた。

航海では、右腕だけのため、帆を揚げる作業や波で大きく揺れる船上での細かなロープワーク、食事等に手間取った。またパナマ運河に向かうカリブ海で大きなシケに遭ったり、マストを越える10mほどの高波に何度も襲われたこと。カナリア諸島に寄港した際には、陸地で片腕がないために体を支えきれず高所から転落し腰骨を折って1ヵ月入院したこと。アフリカのカーボベルデでは船外機を盗まれたこと等トラブルに悩まされた航海であった。

工夫、独創性

ウインチをセルフテラーリングする。

1997 冒険情報一覧表

	山	縦横断	海	極地	空	川	その他	計
個人活動	27	74	6	2	0	0	1	110
団体活動	73	12	6	2	1	0	0	94
合計	100	86	12	4	1	0	1	204